●類句・類想・類型

立ちふさがる句を断ちきって

井沢　正江

だいぶ前になるが、テレビを見ていると梅林の風景がうつり、俳人数名が吟行におとずれている姿がとらえられた。すでに構成されたものかどうか知らないが実況映像で、アナウンサーが一人の俳人にさかんに質問していた。そして最後に一句の披露を頼んでいるのを見ておどろいた。俳句に季語があることは承知しているのであろうが、季題となる事物が眼の前にあれば直ちに一句できるものという一般常識を持たれている俳句とは、どういう文芸なのだろう。そんなことを感じながらテレビ風景を見ていたが、俳句入門当時、「桜」の句は爛漫と咲くと言えばよく、「梅」は馥郁と匂うとのべれば済むと考えていたことを想い出すと、アナウンサーの無理解もあながち笑えぬと思った。

相当の知識人でも俳句は簡単にできるものと思っている。まして趣味の一つに句でも作ろうかと入門する大方の認識は、私の入門当時と同様であろう。それでは俳句にならぬと教えられて、師や先輩がどのように桜を眺めてどのように句にするのかを学んでゆく。

初学時代はそれが手本となり、知らず知らずのうちに物の見方、考え方が師や先輩に似てゆくことは否めない事実と言える。類想句、類似句が初心者に多いのは当然であろう。

初学時代の一つの勉強法ともいえる類想、類似は、大方の俳人が通る道で、それを責めるのはいささか酷であるが、そこから脱皮して早く手本から離れ、自らの眼と自らの心が創り出すものを十七字の表現にのせる努力がなければ、他人の真似で終わってしまう。

現代俳句人口は膨大な数にのぼり、句歴を問わず作品発表の場は結社雑誌から新聞、雑誌等無限にある。そこで発表された句にしばしば類想、類似句があるのもそのゆえであろう。

しかし十七字と季語の制約の中で、自ら気付かず類想、類似するのも俳句という文学の永遠にのがれがたい業のようなものという感じがする。これは結社内の句であるが、

夜も焚く年の火つきぬものの如

という私の句から五年経てある人が作った句が、結社の選集欄にのった。

年の火をつきざるもののごとく焚く

作者も選者も全く気付かぬ類想と表現の類似に、知らず知らずの真似のおそろしさを感じたことだったが、結社内ではひょっとするとありがちなことかもしれぬ。

他人の句を詠んで句心の養いにする、秀れた句に惚れ込んで暗誦するほどに脳裏にきざむ、共に句作勉強の方法として大切なことであるが、それが邪魔になることもある。対象に眼を凝らしているうちにいつか人の句が自分と対象の間に立ちふさがっている。こんな想いで句を作った経験は誰にでもあろう。立ちふさがる句を断ちきって自分自身にかえることができた場合は、まず自分の句ができたと考えてよいと思う。句作は誰のものでもなく自分ひとりのものという信念がなければ、類想からぬけ出ることはできない。

類似句でよく見かけるのは、他人の句で感心した表現をおのれの句に使うのがある。

数年前、高野山で「雪解」の研修会が催されたとき、一三〇名あまりの互選でも爽雨選でも好成績だった句がある。

咆哮をもて口漱ぎ山の秋　赤松　蕙子

その後、句会の句稿や選集投句で「咆哮」を使った句がやたらに多くて閉口したと師から聞き、作者がこの二字を絶対の表現として選んだことを、単に気の利いた熟語くらいの考えで句に使用したのと一句の深さがどんなに違うか、類似の点に気が付いているのか、いささかおそろしい気がした。

初学の類想、類似とは異なって、相当の句歴の人達が犯す表現の真似は語彙の貯えの貧しさからくるので、言葉を貯える努力は常日頃からの勉強であろう。自ら貯えた言葉は自分の言葉となるという自覚、これが表現の類似からのがれる一番の方法である。

類想、類似は俳人の業のようなものと言ったが、松本たかしの句と覚えていた句が虚子の句で、しかも、たかしにもほとんど似た句があったのにおどろいた。

聞えざる涼み芝居を唯見をり　虚子（昭13）
星涼し道に聞ゆる旅芝居　たかし（昭16）

この句は、虚子に心酔したたかしが無意識に先に作った師の句を下敷きにしてしまったのであろう。

その中に境垣あり冬木立　虚子（昭14）
冬木中寺社を境す築地あり　たかし（昭18）

これも同様である。

一見類想、類似に見えて、味わいが異なる句もある。

寒鯉はしづかなるかな鱠を垂れ　秋櫻子（昭8）
寒鯉のたむろに倦みてそよぐ尾か　爽雨（昭51）
子子のおどろくさまのあからさま　蕙子（昭31）
おどろきの水輪かさなり水すまし　狩行（昭54）

これを類似といえば、類似句はかぎりなくある。人ごとではない気さえする短詩型のきびしさをつくづく感じる。